

地域看護学実習指導者による学習効果を高めるための指導上の工夫

(地域看護学実習／実習指導者／指導の工夫)

榊原 文・小笹美子・福岡理英

Instructional Efforts of Community Health Nursing Practice Instructors to Increase Learning Effects in Students

(community health nursing practice / nursing practice instructor / instructional effort)

Aya SAKAKIHARA, Yoshiko OZASA and Rie FUKUOKA

Abstract This study aimed to identify instructional efforts of community health nursing practice instructors to increase learning effects in students, while focusing on the activities offered to certain groups or communities and on the cooperation with other professionals or institutions. Group interviews were conducted involving 27 nursing practice instructors, and the obtained data were analyzed using a qualitative approach. As the results, 4 categories were extracted: <<help students understand the features of the community by studying the importance of a sense of unity>>, <<help students experience health nursing activities conducted based on the features of the community>>, <<explain the meaning of cooperation with other professionals and institutions>>, and <<support students' learning while cooperating with other professionals and institutions>>. The nursing practice instructors provided students with opportunities to develop a sense of unity with the community in nursing practice, helping students experience the true nature of nursing practice by encountering community residents with different values. The instructors also provided learning support while cooperating with other professionals and institutions, in order to teach students about the significance of cooperation in the promotion of healthcare and welfare services. The results indicate the importance of providing students with opportunities to experience nursing activities, as well as the need to be actively involved with students in order to deepen their learning based on their experience.

【要旨】本研究の目的は、集団・地域を対象とする活動と他職種・他機関連携に焦点を当て、地域看護学実習指導者が学習効果を高めるために意図して行っている指導上の工夫を明らかにすることである。実習指導者27名にグループインタビューし、質的分析を行った。分析の結果、《地域と一体感を育んで特性を捉えさせる》《地域の特性を踏まえた保健活動を体験させる》《他職種・他機関連携の意味を伝える》《他職種・他機関と連携し学習支援をする》の4カテゴリーが抽出された。実習指導者は、学生と地域との一体感を育みながら保健活動を体験させることで、住民の多様な価値観に触れながら看護を実践する醍醐味を味わえるようにしていた。また、他職種・他機関と連携した学習支援により、保健医療福祉の推進における連携の意味を伝えていた。本研究により、体験する機会をつくることの重要性と、体験に基づいて学生の思考を深めるための意図的な関わりの必要性が示唆された。

I. 緒 言

国民のニーズは生活習慣病や介護予防、虐待や自殺、DV (domestic violence) への対応、さらに感染症や災害に対する対応など広範囲に複雑化してきており、保健師にはさらなる専門的で高度な実践能力が求められて

いる^{1,2)}。一方で、2008（平成20）年度の保健師教育機関を対象に行われた調査によれば、専門職として保健師に必要な実習内容が十分体験できていない現状が報告されている³⁾。その背景には、地域看護学実習を受け入れる実習地の状況が厳しく、一か所当たりの学生の受け入れ人数が少ないことによる実習施設数の増加と実習施設における保健師の少なさから、教員や保健師が学生の指導に十分な時間をかけられない状況がある⁴⁾。しかし、学生は実習で体験することによって学びを統合し実践能力を習得できるものであることから、保健師教育の質を確保するために地域看護学実習の充実を図ることが喫緊の課題となっている⁵⁾。

先行研究では、実習指導者により、実習目標や実習内容を示した実習計画案の作成⁶⁾と、その計画を実施するためのマニュアルが作成されている²⁾が、実習指導者が学習効果を高めるために意図して行っている実習上の工夫について確立した知見は示されていない。大学側が学習効果を高めるために取り組んだ実習方法としては、学生単独で行う家庭訪問実習の効果^{7),8)}や、フィールドワークを用いた地域看護診断演習と実習の効果⁹⁾、地区踏査やインタビューの有用性^{9),10)}、地域と共同で実施した地域担当制による実習の効果が報告されている¹¹⁾。学生の学びについては、他職種・他機関との連携についての学びが漠然としていること^{12),13)}、実習の到達度に対する学生の自己評価は、個人・家族を対象とする活動に比べて、集団・地域を対象とする活動の項目が低いことが報告されている¹⁴⁾。しかし、地域看護学実習指導者が学生の学習課題を解決する指導上の工夫については明らかにされていない。2013（平成25）年4月の厚生労働省通知「地域における保健師の保健活動について」では、地域診断に基づいたPDCAサイクル（plan-do-check-act cycle）の実施と、地域特性を踏まえた総合的な活動展開を他職種、関係機関、住民等との連携により展開する重要性が示されている¹⁵⁾。保健師は、地域での健康課題解決のために、個人、グループ・地区組織、専門職種・機関等の間に連携・協働しながら重層的で有機的な相互関係を築く¹⁶⁾必要がある。

そこで、本研究は、集団・地域を対象とする活動と他職種・他機関連携に焦点を当てて、地域看護学実習指導者が学生の学習効果を高めることを意図して行っている指導上の工夫を明らかにすることを目的とする。本研究により、先行研究で示された学習課題に対応する方法について示唆を得ることができ、実習指導者が指導を行う上での参考資料になると考える。

II. 方 法

1. 本学の地域看護学実習について

本学は看護師保健師統合カリキュラムであり、学生全員が看護師及び保健師国家試験受験資格に必要な科目を受講する。本研究のテーマである地域看護学実習は、鳥根県全域をフィールドに、市町2週間の後、保健所1週間の実習を行っており、地域特性に応じた保健活動の理解につなげている。地域診断、健康教育、家庭訪問を必須の実習課題としており、地域診断で見出した健康課題に対する健康教育及びその成果を評価することで、PDCAサイクルを踏まえた一連の保健師活動を体験させている。健康診査、地域組織活動については実習期間中に機会があれば、体験することとしている。

実習指導体制として、5名の教員に加え、長年保健活動に従事してきた保健師を嘱託講師として依頼し、広範囲な実習地の指導体制を補っている。

2. 調査方法

1) 対象

地域看護学実習の臨地実習指導者27名

2) データ収集期間

平成26年5月

3) データ収集方法

グループ編成は、発言しやすい人数にするため、実習施設の人口規模の違いにより県、市、町の3つに分けた。3グループとも40分程度のインタビューを実施した。場所はプライバシーが保たれ、インタビューが遮られないように、それぞれ別室とした。インタビュー内容は、実習指導者が学生の学習効果を高めるために意図して行っている方法、学生の反応から効果があると感じた実習方法についてである。研究者がファシリテーションおよび記録・観察を行った。インタビュー前に研究者間で打ち合わせを行い、インタビュー内容や配慮すべきことについて確認をした。発言の無理強いはせず自由に発言できるようにし、参加者同士の意見交換が活発に進むように進めた。

参加者の承諾を得て、インタビュー内容を可能な限り詳細に記録した。

4) 分析方法

実習指導者に対して行ったグループインタビューの記録をデータとして質的記述的に分析した。記録されたデータから、他職種・他機関との連携および集団・地域を対象とする活動について学びを深めるために進んでいる指導上の工夫を抽出し、一つのまとまりを

1 単位として、内容の意味を損なわないように要約してコード化した。その後、類似する意味内容ごとに区分し、カテゴリー化した。

分析にあたっては、研究者間で検討を重ねると共に、分析の妥当性を実習指導者に確認することで信頼性を確保した。

3. 倫理的な配慮

実習前に実施している実習指導者会議終了後、インタビューの機会を設定した。対象者に対して、研究の趣旨、プライバシーの保護、参加は自由意志であること、研究結果を学会等で公表することについて口頭で説明し、了承を得た。データ収集にあたっては、発言を強いることがないように配慮した。データ分析では、個人や実習機関の固有名詞は使用せず、発言者が特定されないようにコード化し、プライバシーに配慮した。データは鍵のかかる保管庫に入れて保管し、分析用に匿名化し加工したデータ以外は破棄した。

III. 結 果

1. 対象者の概要

保健所保健師 9 名、市保健師 12 名、町保健師 6 名であった。保健師の経験年数は 3 年以上、実習指導経験は 2 年以上であった。

2. データ分析により導かれたカテゴリー

データ分析の結果、県・市町で実習上の工夫に大きな違いがなかったため、県・市町のデータを統合して分析した。その結果、指導上の工夫として、50 のコードから 11 のサブカテゴリー、4 のカテゴリーが抽出された。カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、コードを「 」で示す。

4 のカテゴリーは、《地域と一体感を育てて特性を捉えさせる》《地域の特性を踏まえた保健活動を体験させる》《他職種・他機関連携の意味を伝える》《他職種・他機関と連携し学習支援をする》であった。(表 1)

《地域と一体感を育てて特性を捉えさせる》は、地域に入り込んで、地域の特性を理解させる工夫である。公民館職員や子育てサークルの代表者等にインタビューする機会を設ける等の〈住民の生の声を聴く機会をつくる〉、地区踏査で住民の暮らしぶりが伝わるような場所に行く、豪雨災害の爪跡をみせる等の〈現実感を持って地域をみせる〉、ホームステイを実施する、実習フィールドとなる地区を選ぶの〈住民と交流して生活を捉える機会をつくる〉の 3 サブカテゴリーで構成されてい

た。

《地域の特性を踏まえた保健活動を体験させる》は、地域組織活動や地域特性を踏まえた集団支援を見学・体験する機会をつくり、保健師の地域づくり活動の実践や思いを語る工夫である。地域組織活動に参加して一緒に活動展開させる、住民のニーズを聞いて健康教育の内容を計画させる等の〈住民と共に地域で活動する機会をつくる〉、健康教育や健康診査での問診を体験させる等の〈集団支援の技術を習得する機会をつくる〉、実習中に難病のつどいを計画する、時間外や土日の研修会や健康づくり活動にも参加できるように調整する等の〈実習期間中に集団支援の機会を計画する〉、保健師と語る会を設けて住民や関係機関と協働で取り組んできた健康づくり活動を伝える等の〈保健師の看護観に触れる機会をつくる〉の 4 サブカテゴリーで構成されていた。

《他職種・他機関連携の意味を伝える》は、地域の社会資源の見学と連携の実際を見せて、連携の目的や方法を説明する工夫である。精神保健福祉関連機関や児童相談所等を見学させて、業務の理解と連携の実際を説明する等の〈地域の社会資源の多様性を知らせる〉、がん予防担当者会議等で保健所保健師が関係機関の取り組みを推進する役割を見せる、会議までの準備や運営方法を見せる等の〈他職種・他機関と連携する技をみせる〉の 2 サブカテゴリーで構成されていた。

《他職種・他機関と連携し学習支援をする》は、市町・保健所が連携して実習を受ける、多職種や実習担当課以外の保健師が連携して実習指導に関わる工夫である。市町・保健所の役割機能や連携が理解できるように合同で実習計画を立てる、市町・保健所が合同でカンファレンスを開催する等の〈市町・保健所が連携して実習を受ける〉、多職種にカンファレンスに出席してもらいコメントをもらう、本庁だけではなく支所でも実習を受ける等の〈多職種が連携して指導する〉の 2 サブカテゴリーで構成されていた。

IV. 考 察

1. 地域特性の理解を踏まえて保健活動を体験させる

実習指導者は、学生が住民の声を聴き、住民と交流し、現実感をもって地域をみる機会をつくることで《地域と一体感を育てて特性を捉えさせる》工夫をしていた。そして、地域との一体感を育みながら、地域組織活動に参加させて〈住民と共に地域で活動する機会をつくる〉、住民のニーズを踏まえた健康教育を行う等〈集団支援の技術を習得する機会をつくる〉ことを重視し

表1 実習指導者による指導上の工夫

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
地域と一体感を育てて特性を捉えさせる	住民の生の声を聴く機会をつくる	長期療養児親子交流会の代表者等にインタビューする機会を設ける。
		難病の方と話をする機会をつくり、当事者の視点が持てるようにする。
		社会適応訓練事業利用者に話を聞く場を設ける。
		母子保健推進員、公民館職員にインタビューする機会を設ける。
		地域組織活動のリーダーにインタビューする機会を設ける。
		長年健康づくり活動をしている住民にインタビューする機会を設ける。
		子育てサークルの代表者と話をする機会をつくる。
	現実感を持って地域をみせる	健康課題を有する人をサポートしているボランティアと話をする機会をつくる。
		初日に学生と地域を巡り、実際の地域を知ってもらう。
		地区踏査で、人々の暮らしが伝わるように新興住宅や山間部等、様々な場所に連れて行く。
		家庭訪問では高齢者の方々の厳しい生活を理解してもらえるようにケースを選定する。
		家庭訪問では超少子化の地域で、継続的な子育て支援を必要とするケースを選定する。
住民と交流して生活を捉える機会をつくる	豪雨災害の爪痕をみせ、生活の厳しさが理解できる家庭や地区を選定する。	
	学生の地域診断より、実習フィールドとなる地区を選び、地域に入り込ませる。	
地域の特性を踏まえた保健活動を体験させる	住民と共に地域で活動する機会をつくる	地域の理解を深めるため、ホームステイを実施する。
		健康教育を実施する対象者に事前に会う機会をつくり、対象者のニーズや特性に合わせた健康教育の内容を計画・実施させる。
		地域組織活動に学生のみで参加し、一緒に活動展開させる。
	集団支援の技術を習得する機会をつくる	地域組織の準備期～発展期にある様々な組織に参加させ、組織の発展過程に応じた支援について考えさせる。
		健康教育の時間を十分にとり、学生に健康教育の楽しさを体感させる。
		健康教育の技術が向上するように、繰り返し健康教育する機会を設ける。
		健康教育の参考にしてもらうため、保健師が健康教育を行う場面を見せる。
	実習期間中に集団支援の機会を計画する	あらゆる対象者への健康教育ができるように、学校や企業など場所の選定に配慮する。
		特定健診では、事前にオリエンテーションをした上で、問診を体験させる。
	保健師の看護観に触れる機会をつくる	実習中に必ず「難病のつらい」を開催する。
		実習計画を立てる際、時間外や、土日に開催する研修会や健康づくり活動に参加できるように調整する。
		管理職の保健師に、住民や関係機関との協働で地域づくりを行う大切さを話してもらう。
他職種・他機関連携の意味を伝える	地域の社会資源の多様性を知らせる	新任保健師との交流会を設け、地域全体の健康づくりができる楽しさを体験をもとに話してもらう。
		保健師と語る会を1時間程度設けて、思いを込めて取り組んできた地域の健康づくり活動について話をする。
		精神保健福祉関連機関の見学をさせ、施設の位置づけと保健師とのつながりを説明する。
		環境保健公社の見学をさせ、業務の理解を図り保健活動とのつながりを説明する。
		福祉施設の見学をさせて、施設理解と連携の実際を伝える。
		総合医療センターの見学をさせる。
	他職種・他機関と連携する技をみせる	難病患者の退院に向けた支援として、退院前の施設見学に立ち合わせる。
		圏域内の社会資源を生かし、難病相談支援センターでの実習を行う。
		児童相談所の見学をさせ、施設理解と連携の実際を伝える。
		がん予防担当者会議等、関係機関との会議で保健所保健師が関係機関の取り組みを推進する役割を見せ、運営上意図して行っていることを伝える。
		難病医療研修会等の関係機関・関係職種に対して行う研修会に参加させ、保健所が関係機関のスキルアップを図る役割を見せ、目的や配慮していることを伝える。
		精神障がい者退院支援ワーキングや健康づくり推進会議等、他職種他機関との会議の中で、会議までの準備や事前打ち合わせ、運営方法を見せる。
他職種・他機関と連携し学習支援をする	市町・保健所が連携して実習を受ける	連携の実際が見学できるように実習中に関係者会議を開催する。
		中間カンファレンスや最終カンファレンスを市町・保健所合同で開催し、市町実習と保健所実習の学びをつなげる。
		市町の指導者と保健所の指導者の合同会議をもち、それぞれの役割機能や連携が理解できるように実習計画を検討する。
	多職種が連携して指導する	様々な保健事業に参加できるように、実習日を市町・保健所で相互に入れ替えし、柔軟な対応をする。
		カンファレンスには、保健所長、課長、各課の保健師(先輩から若手まで)が出席してコメントする。
		カンファレンスには事務職、栄養士、看護師、歯科衛生士等、多職種が出席してコメントする。
		本庁だけでなく、支所でも実習を行い、それぞれの役割と連携を学生に見せる。
		実習担当課ではない介護保険課の保健師の指導のもと、介護保険の訪問を取り入れる。
		社会福祉士から、保健師との連携の実際を話してもらう。
		健康教育のリハーサルを保健師だけでなく、一般職員に見てもらい、コメントをもらう。
		保健関係者定例会で学生が行った地域診断を発表してもらい、参加者からコメントをもらう。
		実習指導者以外の事業担当保健師からも指導・記録へのコメントをしてもらう。

ていた。これらの結果から、実習指導者は、地域の特性を踏まえた保健活動の理解のために、地域に入り込んで地域診断をさせ、見出した健康課題に対して集団支援を体験させており、それがPDCAサイクルにそった一連の保健師活動の理解にもつながっていると推察される。これは実習指導者が大学の方針を踏まえて、地域診断や健康教育、地域組織活動等を相互に関連づけて学習を深めている工夫と言える。また、保健師が住民と関係機関と協働で取り組んできた健康づくり活動とその思いを語ることが〈保健師の看護観に触れる機会〉となり、学生が地域に入り込んで体感したことを意味づける工夫であると考えられる。本学は統合カリキュラムの中で、学生が様々な発達段階や健康レベルにある人々の社会的・文化的背景を踏まえて、生活者として総合的に捉える力、対象に適した看護を提供する力を養うことを重視している。これらの方法により、学生は地域の文化や住民の多様な価値観、生活実態を五感で感じ、地域に溶け込みながら、個別・集団・地域を対象としたダイナミックな看護を実践する醍醐味を味わうことができると考える。さらに、実習での学習効果を高めるためには、見学・体験の機会を提供するだけでなく、学生自身が実習体験を振り返り、活動の背景や活動に込められている保健師の意図や目的などについて考察することが重要である¹³⁾。そのためには、学生に見学・体験したことの意味や地域特性を踏まえた保健活動の必要性を考えさせる実習指導者や教員の意図的なかわりが必要であり、加えて既修の講義・演習・実習の学びとつなぎ合わせて、実習中のカンファレンスや実習後の振り返りの中で言語化できるように指導する工夫が必要である。

地域診断の演習・実習方法として、今回示された〈住民の生の声を聴く機会をつくる〉〈現実感をもって地域をみせる〉方法は、先行研究においても、学生が地域に特徴があると実感できること¹⁰⁾、『地域の人々の持つ力を見出す』視点が養われること⁹⁾が明らかにされており、本研究の結果も同様であった。今回さらに、ホームステイを実施する等の〈住民と交流して生活を捉える機会をつくる〉、地域組織活動に参加して一緒に活動させる等の〈住民と共に地域で活動する機会をつくる〉工夫が示された。地域看護のパートナーは地域であり¹⁷⁾、〈住民と共に地域で活動する機会をつくる〉ことで、学生は地域とパートナー関係を築きながら、物事を多角的に捉える力や対象者をありのままに受け止め、感じる力を高めることができると考える。実習地である島根は、従来より、住民主体の地域組織活動を重視し、住民と協働して健康づくりを行っている¹⁸⁾。実習で地区

組織活動を学ばせたくても、活動の有無や時間の関係でできない課題が挙げられている⁶⁾が、島根では住民と共に健康づくりを行う地域組織活動の基盤があるからこそ、学生に〈住民と交流して生活を捉える機会をつくる〉〈住民と共に地域で活動する機会をつくる〉ことができていると考える。

保健師の集団支援技術として重要な健康教育や健康診査での問診については、〈集団支援の技術を習得する機会をつくる〉方法が示された。これらの内容は、保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度として「少しの助言で自立して実施できる」レベルであり⁴⁾、主体的に展開できる能力を身につける上でも重要である。また、住民への支援を実際に体験することは、《地域と一体感を育んで特性を捉えさせる》機会ともなる。学生が住民の声を聴き、コミュニケーションを図り、支援を体験することは、エンパワメントのプロセスである傾聴・対話・行動¹⁹⁾そのものである。そのため、《地域と一体感を育んで特性を捉えさせる》〈住民と共に地域で活動する機会をつくる〉〈集団支援の技術を習得する機会をつくる〉ことは、住民の持つ力を実感する機会になるだけでなく、学生のエンパワメントを高め、学習意欲の向上につながると考える。

2. 他職種・他機関と連携した学習支援により連携の意味を伝える

他職種・他機関連携を学ぶ上では、地域の社会資源や関係機関を把握し、何を目的にどのような方法で連携・協働するのかを理解することが重要になる。しかし、先行研究では、学生は誰とどのように連携・協働を行うのが具体的に学べていない¹³⁾こと、連携の目的や連携をとるために大切な方法が学べていない¹²⁾ことが指摘されている。今回、〈地域の社会資源の多様性を知らせる〉方法が示され、単に社会資源の見学をさせるだけではなく、連携の実際を伝える工夫がなされていた。この工夫により、学生は、地域の健康課題に対して保健師だけでは解決できないことを知り、関係機関と連携することで地域づくりを行う保健師の役割¹⁷⁾を理解することができると考える。また、「実習中に関係者会議を行う」ことで、連携の実際を見学する機会を確保し、「会議までの準備や事前打ち合わせを見せる」ことで、〈他職種・他機関と連携する技をみせる〉ことができていた。ネットワークには形成過程があり、問題意識とビジョンを共有し、協働の積み重ねや関係強化のための役割分担等を行い、行きつ戻りつしながら循環的に形成される¹⁶⁾。それゆえに、会議場面だけでなく、会議の準備や事前打ち合わせを見せることは、連

携体制がすぐに構築されるものではなく、連携の積み重ねと工夫が必要であることを学ぶ機会になる。また、「会議の運営上意図して行っていることを伝える」等、連携の目的や連携する上で保健師が意図して行っている方法を説明する必要性が示唆された。連携場面を見学するだけでは捉えきれないことを説明で補っているものとする。さらに学生の主体的な学びを促す上では、連携場面の見学後、保健師から学生に説明する前に、学生自身に連携の目的や連携する上で必要な配慮を考えさせる働きかけが必要である。

さらに今回、〈市町・保健所が連携して実習を受ける〉工夫が示された。通常、市町村での実習において活動の基本となる事柄を学び、後続する保健所で実習体験を積み重ねるようにしている大学が多く¹²⁾、本学も基本的には同様ではある。しかし、「市町の指導者と保健所の指導者が合同会議をもち、それぞれの役割機能と連携が理解できるように実習計画を検討する」「様々な保健事業に参加できるように、実習日を市町・保健所で相互に入れ替えする」等、協働による実習体制が構築されていた。これは、日頃からの市町・保健所との連携体制があつてこそ成り立つものである。この実習体制によって、学生は市町・保健所双方の役割機能や連携の実際が理解できる様々な事業を見学・体験することができる。また、「中間カンファレンスや最終カンファレンスを市町・保健所合同で開催する」ことで、市町実習の学びの状況を踏まえて後続する保健所実習に生かすことができるとともに、最終カンファレンスでは、市町・保健所双方における実習の学びを統合させて、行政における保健師の役割や、市町・保健所の役割機能と連携を考察することができる。この市町・保健所との協働による実習体制により、学生は、市町・保健所がパートナーとして連携しあいながらよりよい保健活動を目指していることとの理解につながり、〈他職種・他機関と連携する技をみせる〉機会にもなる。同様に〈多職種が連携して指導する〉工夫も、実習施設内の連携により実習が受け入れられていることを学生が感じる機会になり、連携の重要性を理解することにつながると考える。

《他職種・他機関連携の意味を伝える》《他職種・他機関と連携して学習支援をする》工夫は、地域包括ケアの理念のもと、多様な関係機関が連携して保健医療福祉の推進に取り組んでいることを、実習施設と関係機関との連携の中で示していく重要な方法である。

3. 研究の限界と今後の課題

今回対象とした実習指導者は本学の実習指導者のみ

であったこと、限られたグループインタビューの時間内で聞くことができたデータを基にしていることから、データの飽和度が不十分であった。また、実習指導者を対象としているため、学習効果を学生の反応を基に判断することが出来なかった。今後、さらに対象者を広げて研究を積み重ねていくと共に、明らかにされた指導上の工夫によって、実際にどのような学習上の効果があるのかを検証することが課題である。

V. 結 語

1. 実習指導者が、集団・地域を対象とする活動と他職種・他機関連携について学習効果を高めるための指導上の工夫として、《地域と一体感を育てて特性を捉えさせる》《地域の特性を踏まえた保健活動を体験させる》《他職種・他機関連携の意味を伝える》《他職種・他機関と連携し学習支援をする》の4カテゴリーが示された。
2. 《地域と一体感を育てて特性を捉えさせる》《地域の特性を踏まえた保健活動を体験させる》ことにより、学生が地域の多様な価値観に触れながら、集団・地域を対象とした支援を体験する機会をつくっていた。
3. 《他職種・他機関連携の意味を伝える》《他職種・他機関と連携し学習支援をする》工夫により、多様な関係機関が協働して保健医療福祉の推進に取り組んでいることを、実習施設と関係機関との連携の中で示していた。
4. 本研究により、体験する機会をつくることの重要性と、体験に基づいて学生の思考を深めるための意図的な関わりの必要性が示唆された。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、インタビューに応じてくださるとともに、学び多い実習を提供して下さっている実習指導者の皆様、データ分析の妥当性を確認していただきました県央保健所健康増進課長 沖原典子氏に深謝いたします。

文 献

- 1) 荒賀直子, 今井睦子, 奥山則子 他: 保健師教育

- の技術項目と卒業時の到達度（案）の提案, 保健師ジャーナル, 63 (11), 1000-1005, 2007.
- 2) 鎌田久美子: 保健師教育の質を確保するための臨地実習の方法と要件に関する調査研究, 平成22年度地域保健総合推進事業, 2011.
- 3) 松井通子: 保健師教育における臨地実習のあり方に関する調査研究報告書, 平成20年度地域保健総合推進事業, 2009.
- 4) 厚生労働省: 「看護教育の内容と方法に関する検討会 第一次報告」, 2010.
- 5) 鎌田久美子, 大場エミ, 岡島さおり 他: 公衆衛生看護学を体得できる実習のあり方, 保健の科学, 53 (6), 398-404, 2011.
- 6) 森岡幸子, 松井通子, 鎌田久美子 他: 保健師教育における新カリキュラムに対応した臨地実習のあり方に関する調査研究, 平成21年度地域保健総合推進事業, 2010.
- 7) 俵 麻紀, 北山三津子, 御子柴裕子 他: 家庭訪問実習の教育効果, 長野県看護大学紀要, 2, 17-27, 2000.
- 8) 坪内美奈, 松下光子, 森 仁実 他: 保健師の実践上の課題と連動させて実習を行なうことの教育効果におよぼす意味, 岐阜県立看護大学紀要, 10 (1), 3-11, 2009.
- 9) 今松友紀, 田高悦子, 有本 梓 他: 自治体でのフィールドワークを用いた地域看護診断演習・実習プログラムの開発と評価, 横浜看護学雑誌, 6 (1), 29-34, 2013.
- 10) 菅原京子, 後藤順子, 渡曾睦子 他: 地域看護診断を主要な目標とする実習の成果と課題, 山形保健医療研究, 8, 41-51, 2005.
- 11) 山下清香, 尾形由起子, 小野順子 他: 地域と共同で実施した地域担当制の地域看護学実習の評価, 福岡県立大学看護学研究紀要, 11 (2), 53-61, 2014.
- 12) 下村聡子, 安田貴恵子, 酒井久美子 他: 地域看護実習での体験を通して得られた学生の学びー市町村および保健所における実習に焦点をあててー, 長野県看護大学紀要, 14, 35-49, 2012.
- 13) 片岡三佳, 普照早苗, 松下光子 他: 地域基礎看護学実習終了後のレポート分析からみた学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 8 (2), 3-10, 2008.
- 14) 林 知里, 横山美江, 藤村一美 他: 「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度」における学生の自己評価ー実習形態の違いによる到達度の比較ー, 大阪市立大学看護学雑誌, 10, 1-10, 2014.
- 15) 厚生労働省健康局長通知: 地域における保健師の保健活動について, 健発第0419第1号, 2013.
- 16) 越田美穂子, 守田孝恵: コミュニティでのネットワーク形成過程における行政保健師の機能とその意味, リハビリテーション連携科学, 10 (1), 18-26, 2009.
- 17) Elizabeth T. Anderson, Judith McFarlane: コミュニティアズパートナー 地域看護学の理論と実際 第2版 (金川克子, 早川和生訳), 133-151, 医学書院, 東京, 2007.
- 18) 永江尚美, 森山佳江, 藤谷明子 他: 伝えたいものをともに探りながら作成した次世代への伝承計画, 保健師ジャーナル, 65 (6), 452-456, 2009.
- 19) 中山貴美子: コミュニティエンパワメントとは? コミュニティエンパワメントと保健師活動, 保健師ジャーナル, 62 (1), 10-15, 2006.

(受理 2016年2月15日)